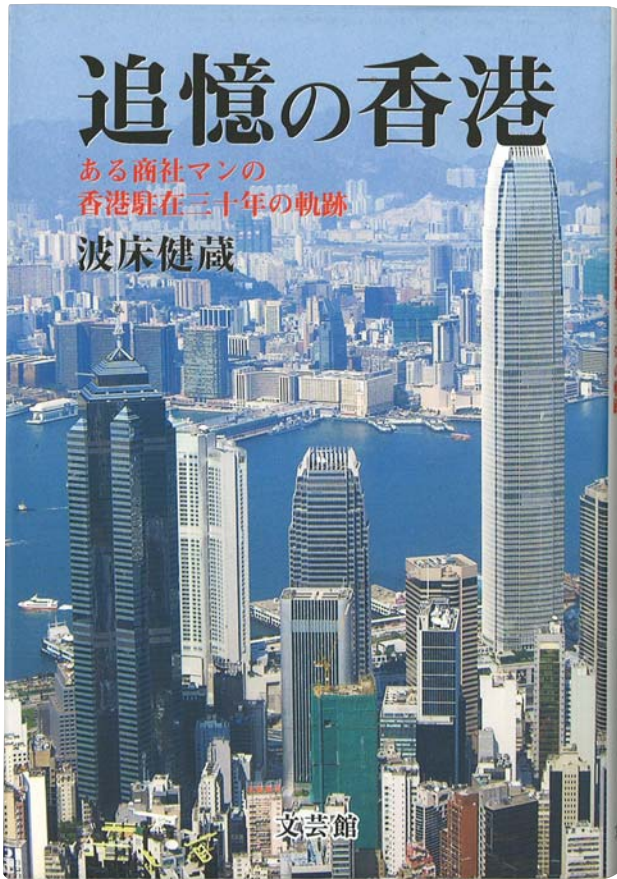




追憶の香港



をテーマに、戦後の各時代に香港で活躍された諸氏に、それぞれの経験を語っていただく方針を決めた。その嚆矢として白羽の矢を、氏に向けることには誰一人として異論はなかった。嗚呼！やんぬるかな。氏は、われわれの切なる願望をお受けになられる前に、あの世へ旅立たれておられた。そこで、止むなく氏の代役は到底務まらぬことは承知の上で、この筆を執っている。

戦後香港の区切り方も一様ではなく、当然様々な切り口が考えられる筈である。今、ここで仮に経済運営の要である人と物の移動に関わる、画期的な事件を取り上げてみたい。植民開始以来、香港島と九龍半島はビクトリア湾を挟んで一衣帯水の間柄にあるとは云え、両者を結ぶ手段はフェリーを擱いてなかった。一たび台風の直撃を受ければ、フェリーは運航を中断し、途端に両地は隔絶した社会と化してしまう運命であった。そこに、1972年第一号海底トンネルが完成、天候に左右されず一日24時間・一年365日両地の一体化は保証されることになった。しかし、それも自動車という限られた交通手段の利用を前提とする制約が残されていた。その壁を大きく破ったのは、1980年のMTR一号線（荃灣-中環）の開通である。その結果、市民は誰でも低廉な料金で両地間を気楽に往来できるようになった。そして止めは、1998年の赤鱗角新空港の開設に他ならない。大嶼山（Lantau Island）と云うかつては、精々辺鄙な漁村を抱える程度の過疎地を生活圏の中に取り込み、九龍半島と香港島の三位一体地勢を作り上げた。香港は絶えず進化している。

(広報委員会)

本稿は、そもそも故波床健蔵氏の手によってなるべき筈であった。氏は、1965年赴任以来1995年まで何と連続30年の長きに於いて、その間変転極まりない香港社会をつぶさに目撃された貴重な生き証人として余人を以って代えがたい存在であった。編集部では、度重ねての討議の結果、今回を皮切りに以後数号に渡って、「香港 いま・むかし」

目次

2009年12月 発行

追憶の香港	1
スモール・イズ・ビューティフル ーやぶにらみ香港経済論ー	2~3
香港日本人学校への再訪	4
キャセイパシフィック航空日本支社長 サイモン・ラージ氏インタビュー	5
全国連合会・各地協会便り	
連合会：全国連合会からのお知らせ	6~7
東 京：アジアユースオーケストラ日本公演を終えて／ 中秋節パーティを開催／上級者向け日本語教室を開催中です	8
関 西：第7回経済セミナー開催「香港人と中国人そして日本人」 香港中秋節パーティー2009	9
中 京：ワールド コラボ フェスタ出展について	10

九 州：九州日本香港協会発足／孫文ゆかりの地をたずねて	11
山 形：アカデミー賞受賞作品「おくりびと」のロケ地、山形	12
北海道：「2009香港 札幌の物産と観光フェア」 「香港・中国 食品販路拡大セミナー」開催について	13
宮 城：マイケル・シー香港貿易発展局元総裁が来仙されました／ 広東語教室で暑気払いを開催しました／ 女性部会主催によるセタライブコンサート及び料理教室を開催しました／ YOUYOUクラブ主催の芋煮会を開催しました	14
沖 縄：沖縄日本香港協会 通常総会・懇親会 開催	15
コンラッドホテルからのお知らせ	16



NPO法人日本香港協会 会員 塚本 勝弘

香港の生活は狭くて退屈するか

暫らく香港に住んでいると「あんな狭い所では、さぞかし退屈されることでしょう」とよく人に聞かれることがある。大概是、差障りのないように「そうですね」と答えることにしているが、気のおけない相手であったり、それでは却って誤解を招きかねないような場合には、はっきりと否定することも少なくない。考えてみれば、たとえ何処の国に住んだとしても、旅そのものを職業としたり、それ程ではなくても、あちこち始終移動することが不可欠な特別な立場にある人々を除けば、極く普通の市井の徒にとって仕事の上は勿論のこと私事を含めても、日常行動する範囲は限られており、その国全体の大きさと退屈度合、裏返せば生活の充足感とはあまり関係がない。要は、比較的長時間にわたる余暇の過ごし方の可能性如何にあるのではなからうか。例えば、日本に住んでいれば、千葉県の住民で東京に勤め先があり、平素この2点間の往復でほとんど事足りている人でも、年に1~2度(或いは2~3年に1度かも知れない)は同僚と或いは家族共々他府県へ行楽の足を伸ばすことは、極めてありふれた現象であろう。ところが、同様な事が香港でも目につくようになって来ている。かつては、懐具合も含めて諸般の事情から、一般市民が気軽に遊びに行ける場所と云ったら、新界(租借地)か精々お隣のポルトガル領マカオに限られていた。然し、近年国際政治情勢の改善と生活水準の向上が相俟って、まず中国本土との往来が自由になり、それでいて特殊な立場にある人以外は、台湾への出入りも別段の支障はなくなり、加えて日本も含めたアジア諸国に旅行する人の数も年を逐って急激に増加の一途をたどっている。因みに、香港での年間3大ゴールデンウィークと云えば、春節(農曆新年)、復活節(イースター)、聖誕節(クリスマス)をそれぞれ含む時期であるが、試みにその前後に啓徳飛行場並びに紅磡駅へ足を運んでみられよ。その輻輳混雑ぶりは、年末の上野駅あたりを彷彿させるに十分であろう。そのため、観光収入は香港経済の損益計算書上伝統的に有力な財源のひとつであったが、こうして市民が持出す外貨の額も馬鹿に出来ない水準に達し、差引の純増伸び悩みと云う副作用を呈する始末と伝えられる。

香港は自然の宝庫である

又、何も飛行機や汽車でわざわざ領土外に出なくても、もっと短い時間を有意義に過ごす方便も領土内に決して少なくはない。考えても下さい。なにせ、前に海後に山をひかえた土地柄であってみれば、これをフルに活用しない手はない。まず、海に乗出してみよう。金がたっぷりあれば、個人又は企業単独でヨットなりモーターボートを手に入れる—これは大体、中国人の金持か欧米系有力企業のケースである。次は、数人または数社で共同購入する—これなら日経企業の一部でも何とか

手に届きそうな計画。最後にそれでも無理なら、時間決めでその筋の業者から貸借し、ほぼ誰でもわずかな心掛けで一日だけの楽しみを求める方法も残されている。もっと経済的で且つ日頃の車社会で脆弱化一方の足腰を鍛えるにも役立つのが、山野を歩くことである。これが割合盲点のようだ。2~3泊の駆足パック旅行では「香港とはコンクリートのジャングルだ」との印象でも已むを得ないが、長年住んでいても香港の自然の素晴らしさを経験していない人が案外多いのは残念に思う。この点に着目したのが他ならぬマクルホーズ第25代総督で、1971年着任以来4期12年に亘る施政中に、その全領土の40%にも及ぶ広大な土地に合計21個所の郊野公園(The Country Parks)を設定し、普段異常とも云える喧騒と窮屈さに満ちた生活を余儀なくされている市民にとって、週末のささやかな憩いと安らぎの場となっているだけでなく、観光客に対しても十分探勝の対象たり得る景観にも事欠かない。これに巧く相乗りしたのが、今年年中行事として定着した感のある「百萬行」(Walks for Millions)で、毎年一番気候の良い12~3月の間に、郊野公園を含めて5~6個所を選んでコースとし、予めスポンサーを募った参加者が歩いた距離に応じて協賛出資を受け、これを各種社会事業団体に寄附する、地域社会への貢献と自己の健康増進を兼ねた一石二鳥の催しである。年々参加者も増え盛大となり、若し「香港歳事記」の如きを編むとすれば、省くことの出来ぬ季題のひとつと云ってよからう。話はあちこち右往左往してしまっただが、兎角「住めば都」とやらで、狭ければ狭いなりに生活の仕方はあることを申し上げたかった訳です。

香港は住・職・遊近接の便利社会である

さて香港は一御存知のように基本的には英王室直轄植民地であり国家ではないが、それでも重要な政治的問題についての外交権はないにしても、国連内では準加盟メンバーの待遇を受けているし、何よりも香港経済の動脈である対外貿易に関しては、自主的折衝の権限が与えられている点で、実質的に国家機能を持った存在と云えよう—総面積が僅か1,000平方軒強で東京都のおおよそ半分程度の大きさに過ぎない。しかもその70%位は山地で商工業の立地としては云うに及ばず、難民の仮の宿ならいざ知らず、一般には居住にも適さない。いきおい、500万を優に超える住民の大半は残された猫の額のような土地、香港島の北岸及びこれとビクトリア湾をはさんで鼻先を突出している九龍半島の南辺部に密集せざるを得ない。限られた平面に物を無理矢理詰め込めば、圧力は垂直方向に逃げ場を求める以外なくなるのは理の当然である。斯くして、街の中心部の商業用ビルどころか、周辺部に位置する工場すらも屋上屋を重ね、遂には20階30階の世界に類を見ない高層工場アパート群の林立となり、その間隙を縫って居住用フラットが割り込み櫛比する恰好となる。従って、日常行き

来を必要とする所は、やや誇張した表現が許されるならば、すべて指呼の間にある。ここから香港の生活様式が規定されると云ってよい。たとえば、夜の宴会があっても、仕事が終わったあと一旦家に帰り、シャワーを浴びてから駆けつけることが出来るし、家で食事を済ませたあとからでも、まだ音楽会や映画に出掛ける時間的余裕もある。謂うならば、職・住・遊近接の社会構造であり、限られた空間にあらゆる都市機能をパックしてこそ初めて可能な結果ではなからうか。

香港の企業家は先見性に富み変わり身が早い

次に角度を変えて、もう少しマクロ的に観察してみよう。戦前の中継貿易に加えて、現在それよりも遥かに大きい比重を占める加工貿易が円滑に機能するためには、当然これに量的質的に対応するインフラストラクチャーの充実が必要である。コンテナヤードはその取扱量に於いて、近來の新聞報道によれば遂にニューヨークを抜き、ロッテルダムに次いで世界第2位に躍進した由、よく舗装された道路はほぼ満遍なく全領土を覆い、何より見事なのは最南端のアバディーン地区から山をぶち抜いた2つの陸上トンネルとひとつの海底トンネルを使って、北端の中国領との境界線まで一気に走り抜けられることである。こうした事実も、結局はその経済的規模に比較して支配する領域が小さい、従って投資効率が極めて良いことに因るのであろう。この点、同じ新興工業国家群 (NICS) の一員として近年成長が目覚ましいシンガポールとも軌を一にし“小さい”ことが幸いしている好例である。これに反し、只今躍起になって現代化路線を推進している中国の泣き所のひとつは、物資の輸送能力の欠如と云われるが、あの巨大な土地に効率のよい交通網を完備させることは、考えただけでも気の遠くなりそうな至難の業ではあるまいか。ソ連にして亦然りかと考えられる。別のシューマッハ (E. F. Schumacher) 的アプローチを試みるならば、そこには「中間技術」の発想が活かされている面もある。その1例が時計産業である。時計のケース及びバンドの製造は、古くから地場主力産業のひとつであった金属工業の一角で、もともと仲々隆盛であった。そのうちに、一時ソ連から輸入した機械式メカニズムと組合せて、偽物スイス時計に変身させたりして悪評を招いたこともあったようだが、1970年代後半に至り、クォーツ・デジタル化の潮流をタイミングよくとらえ、数年にしてこの道の先進国スイス、日本を凌駕して、あっと云う間に世界最大 (数量ベース) の生産基地になってしまったのは、正に驚きに値するではないか。労働集約的既存土着産業に比較的所要投資額も小さく、無公害、省エネルギー型の先端技術の成果を巧みに結合させた所は、香港企業家の先見性、変り身の早さの証しに他ならない。

香港は柔構造性に支えられた低エントロピー社会である

最後にもうひとつ、違った観点から香港の活力を支えている要因を探してみたい。それは極言すれば、香港社会の柔構造性とでも称すべき特質で

ある。卑近な例を1~2挙げてみよう。例えば、盛り場の交差点近くに立ってみる。人口密度世界最高と云われる九龍の旺角地区あたりに繰出すのが一番よい。成程、交通信号は一応設置されているが、大多数の歩行者は青・黄・赤の色には一向にお構いなく、さっさと横断して行く。それぞれ自己の行動能力と責任に基づき、安全 (そうだ) と判断してのことだ。一方、車を運転する側も自分の進行方向の信号が青なら、歩行者は道を横切らないと云う一方的論理を捨てさえすれば多少はスピードを加減し、必要があればけたたましく驚笛を鳴らしつつ走り抜ける事で、まず大事に至ることも稀有である。若し、歩行者全員がお行儀よく交差点の手前で立止まるとすれば、瞬時にして歩道から溢れ、且つ信号が変わった後も少なからぬ者が与えられた時間内に渡り切れずに取残され、又々混雑が果しなく続くことになりかねない。つまり、一見部分的には無秩序と見えるが、全体としては却ってそれにより調和が保たれているのではあるまいか。吾々の日常の商売の面でも似たような体験をする。一流企業間での取引はさておき、中小規模の商工業者を相手にする以上、決済手段としての小切手の不渡りは日常茶飯事に近く、そんな位でいちいち驚いていては、香港での商売の資格はないと云っても過言ではない。つまり、彼等の世界にあっては、小切手の振出しは常に決済資金の裏付けが100%あり、通貨の代替物であるとの論理は必ずしも通用しない。確かに支払の意志表示ではあっても、現実には即時それを実行する能力有無とは別で、常に多少のタイムラグはあり得ることをお互いに認め合うことが前提になっている。全体がそのような柔軟な関節でつながってれば、問題が起きてても何処か比較的余裕のある部分でそのひずみを一時吸収し、時間を稼ぎつつその間にそれぞれが調整を進めれば、全体のバランスを回復することが可能になる。その結果、事故があっても (最初から悪意が存在する時を除き) 致命傷になるケースはほとんどなく、大概是予測し得る偶発損失の範囲に止まっている。若し、日本のようにすべての関節が硬直的な社会組織で、そこで発生するどんな小さな炎症にも、その都度根治を試みるとすれば、香港経済の骨格を形成している無数の中小企業群は大混乱に陥り、壊滅の危機に瀕すること必定であろう。これもつきつめてみると、規模の問題に帰着しそうである。ひずみの絶対的の大きさが一定限度内であれば、定常状態に戻ることも抵抗少なく安易であるし、それに伴う反動にも耐え得るのであろう。

斯くして、無秩序の寄せ集めの如き外観を呈する現代の怪物「香港」は、その実多様な選択肢と柔軟な思考行動との組合せの中から、常に最善を追求する低エントロピー社会と云えそうである。

注：本稿はほぼ1960年代中葉から80年代はじめ頃にかけての現地体験を基に書かれている。従って、個々の事実については、その後の時間経過に伴う変化により、現状とは必ずしも合致しない所があるが、取立て訂正は施さないことを諒とされたい。



香港日本人学校への再訪

NPO法人日本香港協会 会員 平野 純一
(毎日新聞社週刊エコノミスト編集部次長)

かつて通った母校を訪れることは、いつでもわくわくするものだ。それが、同級生と一緒にとなれば、なおさらだ。

私は7月、1971年から75年まで4年半(小3から中1)通った香港日本人学校を、2人の同級生とともに訪れた。帰国後、93年に妻と一度訪れているが、今回は同級生と一緒に昔話を語り合いながらの再訪だ。34年前の中学生の気分に戻って、胸が高鳴った。

同行してくれたのは、伊東正裕君と武藤錬太郎君。伊東君は香港貿易発展局東京事務所の次長で、このときは長期出張で香港に2カ月間滞在していた。武藤君は香港のフレッド・カン法律事務所で弁護士をしている。2人とも香港に関わって仕事をしているという意味で、我々同級生の中の「出世頭」だ。

待ち合わせた3人は、ハッピーバレーから19番の2階建バスに乗った。2階の一番前の席に陣取り、急な成和道の坂道を登った。終点の藍塘道で降りて、あとは大坑道を歩いて学校に向かう。この辺りの風景はほとんど変わっていない。「通りからあそこを右に入り、坂を登れば学校だ…」昔の記憶は鮮明に蘇る。私は自然に早足になった。

果たして、かつて3人がともに学び遊んだ校舎は、そのままの姿であった。玄関の様子が少し変わり、プールの位置なども変わっていたが、外観は何も変わっていなかった。スクールバスも昔と同じカラーリングのまま、2台停まっていた。

いま小学部は、香港校の他にニューテリトリーに大埔校ができ、さらに中学部はブレイマーヒルに移転したそうだが、当時は、小学1年から中学3年までがこの校舎に通っていた。訪れた日は土曜日で学校は閉まっていたため中に入れなかったが、周囲をよくよく「観察」し、三脚を立てて3人で記念写真を撮った。



香港日本人学校(現小学部)校門にて
(左から伊東・平野<筆者>・武藤)

今回の香港再訪は、伊東君が香港に滞在している間にぜひということを実現した。私が香港にいる間、伊東、武藤両君は、「フル・アテンド」で私に付き合ってくれた。着いた日の夜は、カオルーン・チムサッチョイの「利苑」で北京ダックに舌鼓。翌日は、朝から香港貿易発展局の伊東君のオフィス、フレッド・カン法律事務所の武藤君のデスクを拝見。ワンチャイの「稻香」



広東料理レストラン「利苑」にて
(左から武藤・平野<筆者>・伊東)

の飲茶でお腹を満たした後、前述の日本人学校再訪。その後は15番のバスでピークに上った。やはりピークからの景色を見ずして日本には帰れない。夜はラマ島に渡り、生け簀の魚を選んで調理してもらってシーフードを楽しんだ。北京ダックも、飲茶も、シーフードも、どれも30数年前も食べていた「香港の味」そのままだ。

香港は次から次へと高いビルが建ち、いまでも日本よりずっと早いスピードで発展しているように思う。啓徳空港からランタオ島に変わった新空港は、成田空港よりずっと大きくてきれいだ。私が住んでいた当時は、地下鉄はもちろんのこと、最初は香港島とカオルーンを結ぶ海底トンネルすらなく、カオルーン側に渡るにはスターフェリーに乗るしかなかった。滞在途中でやっと海底トンネルができ、島側とカオルーン間の交通が便利になった。当時一番高いビルは、セントラル地区旧スターフェリー乗り場の脇にある「コンノートセンタービル」(現「ジャーディンハウス」)だった。その時代から比べれば隔世の感がある。

実は香港到着後、私は2人に会う前に、かつて住んでいたハッピーバレーのフラットがどうなっているかを1人で見に行った。新しいビルがどんどん建つ香港だが、通りは何一つ変わっていないので、道を歩けば昔の感覚のままに、地図なしで歩くのも不自由はない。昔のフラットはすでに新しいものに建て代わっていたが、周りの風景は懐かしいままで残っていた。私にとって香港は第2の故郷。古い香港は新しい香港へと変わっても、私の中では新旧は矛盾することなく融合して、美しいままのハーモニーを奏で続けている。

というわけで、週末のわずか2泊3日の香港再訪だったが、2人のおかげでとても充実した旅となった。このように帰国から30年以上経っても、日本人学校での生活を昨日のこのように語り合い、食事をともにできる友人がいることをとても幸せに思う。

我々の学年は、多い時でも人数が50人前後で、クラスが1つのまま進級していった(小4を除く)。クラスが分かれることがなかった分、複数クラスになっていった我々より下の世代に比べて、まとも感があるように思う。日本に帰ってきてからも、大きな同窓会を何度も開いているし、同窓会に限らず、少人数でも会う機会は多い。

いつかはぜひ、香港で同窓会を開きたいという話も出ている。その時は「現地幹事」として武藤君が活躍してくれるだろう。実現すれば、こんなにうれしいことはない。

キャセイパシフィック航空日本支社長 サイモン・ラーズ氏インタビュー

取材・ペン：麻生 雅一郎 撮影：永田 牧子

—ラーズさんは子供の頃を日本で過ごされたとか。日本時代はどんな少年だったのですか？また、日本各地を旅行されましたか？



「1976年から1982年まで父の仕事の関係で東京に6年間滞在しました。父は当時、スワイヤグループで働いており、私は仕事で父の後を継いだ形になります。日本では東京のセントメリーズ・インターナショナルスクールに1年通いました。野球に熱中し、読売ジャイアンツのファンでした。何度か後楽園球場にも観戦に行きました。どこに行っても王貞治選手がビッグヒーローで、私もあこがれていました。他にもアイスホッケーをプレーしたり、両親と相撲を見に行ったりもしました。日本で過ごした日々は私の中で大変印象深く、楽しい思い出として残っています。また当時は京都と神戸しか訪ねたことがなかったので、今度は機会を見つけて日本各地を訪れたいと思っています。」

「1976年から1982年まで父の仕事の関係で東京に6年間滞在しました。父は当時、スワイヤグループで働いており、私は仕事で父の後を継いだ形になります。日本では東京のセントメリーズ・インターナショナルスクールに1年通いました。野球に熱中し、読売ジャイアンツのファンでした。何度か後楽園球場にも観戦に行きました。どこに行っても王貞治選手がビッグヒーローで、私もあこがれていました。他にもアイスホッケーをプレーしたり、両親と相撲を見に行ったりもしました。日本で過ごした日々は私の中で大変印象深く、楽しい思い出として残っています。また当時は京都と神戸しか訪ねたことがなかったので、今度は機会を見つけて日本各地を訪れたいと思っています。」

—今年がキャセイパシフィック航空が香港／東京便を就航させてから50周年。大事な節目の年に日本支社長として赴任されました。

「この記念すべき年に第2の故郷ともいえる日本に赴任でき、大変嬉しく思うと同時に、使命感を感じています。現在、航空業界は世界的に極めて困難な状況にあります。景気の後退に加え、6-8月は新型インフルエンザが旅客の減少に追い討ちをかけた。ようやく9月から少しずつ旅客にも貨物にも回復の兆しが見えてきましたが、まだまだ先行きは不透明です。日本はキャセイパシフィック航空にとって、最重要マーケットの1つであり、現在の最高経営責任者であるトニー・タイラーを始め、歴代トップの多くも日本駐在の経験を持っています。スワイヤファミリーにとっても日本はとてつゆかりの深い国なのです。」

—ラーズさんの基本的な経営方針、今後の経営戦略は？

「キャセイパシフィック航空は高品質なサービスとプロダクト、世界各国でハードルの高い審査を経て選りすぐられたスタッフを有しており、バランスシートも健全です。これら確固たる基盤を元にビジネスを発展させ、現下の厳しい状況を乗り切ることが最優先の課題です。そして日本市場でビジネスを発展させることで、キャセイパシフィック航空全体にも貢献できる体制を築きたい。また日本と香港の交流の発展をビジネス、レジャー双方から支えたいと考えています。」

—香港／札幌線を冬季の期間限定で現行の週4便から毎日1便運航するそうですが？

「香港、中国の人たちにとって日本は人気の旅行

先です。特に札幌は定番の旅行先としてとても人気が高く、今年の7月と8月も増便により毎日1便を運航しました。また年末年始と旧正月の時期にあたる12月1日から1月5日までと2月1日から2月26日も毎年たくさんの旅行者が訪れるため、この時期の増便を決定しました。」

—香港／札幌便の冬季増便以外にも今後、運航回数を増やす路線、また、新たに開設を予定している路線がありますか？

「新たな定期便の就航は、現時点では決定していませんが、チャーター便については今年も年末年始の旅行需要の繁忙期に日本の7都市から、姉妹会社である香港ドラゴン航空と併せてチャーター便／臨時便を運航します。また今後も市場動向に注視しながら日本の各都市から運航の機会を探りビジネスの拡大に努めていきたいと考えています。」

—キャセイパシフィック航空は世界的な景気後退の中でも、路線を拡大し、黒字決算を維持している。一方、日本航空は膨大な赤字を計上し、経営危機が深刻化しています。明暗を分けているのは、何が原因だと考えますか？



「キャセイパシフィック航空は燃料ヘッジ契約における未実現利益により、中間決算では黒字を計上しました。しかしながら、これはあくまで帳簿上の利益です。世界同時不況による影響は航空業界も例外ではなく、

キャセイパシフィック航空では運航機材の最適化や運航路線の見直し、航空機の一時駐機、スタッフへの無給休暇措置など、様々な取り組みを行いコスト削減に努めています。日本航空はキャセイパシフィック航空にとって、ワンワールド・アライアンスを組む大事なパートナーであり、日本航空の困難な状況には胸が痛みます。」

—赴任後、会社内ではどのように過ごしていますか？

「最初の2週間は日本支社のある東京を離れてキャセイパシフィック航空が就航する日本の各都市を訪ね、支店スタッフや関係者とのコミュニケーションに努めました。大阪、名古屋、福岡、札幌と都市ごとに街の様子、産業、航空会社へのニーズも違い、それぞれのニーズに合った対応、挑戦が必要だと感じました。キャセイパシフィック航空日本支社のスタッフは全国に320人おり、その名前と顔を覚えることも大切な仕事です。」

—インタビューの中で今後は日本各地を訪れたいと仰っていました。幕末から明治期にかけての英国の外交官アーネスト・サトウが徒歩と馬車で、後には鉄道も利用して日本全国を回ったのをご存知ですか？

「大学時代は歴史を専攻し、明治から第1次大戦にかけての勃興期の日本の歴史を学びました。アーネスト・サトウは、とても興味深いですね。ぜひ彼の歩いた頃の伝統や風景が残っている地方を訪ねてみたいものです」

「第10回香港フォーラム」 & 「全国協会交流会」

日本香港協会 全国連合会 吉村 壮太郎



全国協会交流会参加者集合写真

第10回香港フォーラムが開催、日本香港協会が
“ベスト・アテンダンス・アワード”を受賞！

ベスト・アテンダンス・アワードの表彰を受ける日本香港協会

去る12月1日・2日、香港ビジネス協会世界連盟 (Federation of Hong Kong Business Association Worldwide/本部=香港貿易発展局内) の世界大会「香港フォーラム」が開催されました。記念すべき第10回目の開催となった今年は、大変な不況下にも関わらず全世界から360名以上の会員が参加し、大盛況のうちに幕を閉じました。

今回は日本香港協会にとっても記念すべき年となりました。日本全国の協会からの参加者は総勢85名を数え、国別での参加者数が世界一となり“ベスト・アテンダンス・アワード”を受賞しました。

また各協会の活動に対して贈られるアワードは、



グランド・アチーブメント・アワードとアウトスタンディング・メンバーシップ・アワードを同時受賞した関西日本香港協会



アウトスタンディング・メンバーシップ・アワードを受賞した北海道日本香港協会

日本・世界からの多数の応募の中から、関西日本香港協会が「グランド・アチーブメント・アワード (年間の活動数・内容を表彰)」 「アウトスタンディング・メンバーシップ・アワード (会員数の増加を表彰)」の2つを、北海道日本香港協会が「ア

ウトスタンディング・メンバーシップ・アワード」を見事受賞しました。

例年同様、2日間の会期中にビジネスセミナー、パネルディスカッション、6分間ネットワーキング、ワークショップ、視察ツアー等多くのイベントが催されました。パネルディスカッションでは合和実業 (ホープウェル) のゴードン・ウー主席、瑞安集団 (上海の新天地等を手掛けるデベロッパー) のビンセント・ロー会長、香港北京エアケータリング社のアニー・ウー総裁の豪華コラボレーションが実現。視察ツアーでは世界最大級の香港コンテナ港やワイナリーの見学等がありました。6分間ネットワーキングでは世界各国の会員同士の活気ある交流が見られました。もちろん、フェアウエルディナーも趣向を凝らしたものとなっており、上環のウエスタン・マーケットを借り切り60年代の香港をテーマに、美味しい料理と楽しい余興を参加メンバー一同堪能しました。



6分間ネットワーキング

全国連合会は今後も世界連盟本部と連携しながら香港フォーラムを活性化させて参ります。来年も是非ご期待ください。

開催報告

過去最多の参加者となった今年の全国協会交流会



「さんさ時雨」を披露される宮城日本香港協会
寺崎理事(左)と武田事務局次長(右)

香港フォーラムの前日の11月30日には、六国ホテルにて全国協会交流会が開催されました。交流会に先立ち、年に1回の全国連合会役員会および各協会からの報告会が行なわれ、活動成果および今後の展開を参加者で共有いたしました。

全国交流会では本年の幹事役である宮城日本香港協会の進行のもと、魯迅の学んだ宮城のPRビデオの放映に始まり、佐々木会長、賤前会長、ラルフ・チャウ香港貿易発展局前日本首席代表の挨拶の後、宮城民謡「さんさ時雨」をご披露いただき、会員間の会話も弾み賑やかな会となりました。

なお、今年の交流会は120名以上の参加者を集め過去最多の規模となりました。来年は今年の規模を上回れるよう、皆様の積極的なご参加をお願いいたします。

フォーラム直後の展示会でも日本の存在感



レセプションで挨拶を行う阿部孝夫市長

香港フォーラム終了後の12月3日～5日の3日間にかけて、香港コンベンション&エキシビション・センターにて、香港貿易発展局主催の展示会「イノベーション・デザイン・テクノロジー・エキスポ(IDTE)」と「世界中小企業エキスポ(WSMEE)」が開催されました。IDTEには川崎市が中心となって日本パビリオンを出展、12月3日には阿部孝夫市長からも講演をいただいた「アジア知財フォーラム」をエキスポ内で開催、またWSMEEでは㈱モスフードサービス櫻田厚代表取締役社長にスピーカーとして登壇いただいた「フランチャイズセミナー」を開催、両イベントとも多くの香港・中国企業関係者が日本からのプレゼンテーションに熱い視線を送っておりました。また、今年は香港フォーラムとの連続開催となったため、フォーラムからも多くの参加者を受け入れることができました。

香港フォーラム終了後の12月3日～5日の3日間にかけて、香港コンベンション&エキシビション・センターにて、香港貿易発展局主催の展示会「イノベーション・デザイン・テクノロジー・エキスポ(IDTE)」と「世界中小企業エキスポ(WSMEE)」が開催されました。IDTEには川崎市が中心となって日本パビリオンを出展、12月3日には阿部孝夫市長からも講演をいただいた「アジア知財フォーラム」をエキスポ内で開催、またWSMEEでは㈱モスフードサービス櫻田厚代表取締役社長にスピーカーとして登壇いただいた「フランチャイズセミナー」を開催、両イベントとも多くの香港・中国企業関係者が日本からのプレゼンテーションに熱い視線を送っておりました。また、今年は香港フォーラムとの連続開催となったため、フォーラムからも多くの参加者を受け入れることができました。

全国連合会からのお知らせ

全国事務局長会議を開催いたしました



事務局長会議集合写真

去る8月28日(金)、香港貿易発展局東京事務所にて2009年度全国事務局長会議を開催いたしました。当日は沖縄以外の7協会の事務局長・代理の局員の皆様に加え、香港特別行政区政府駐東京経済貿易代表部と香港政府観光局の方にもオブザーバーとして出席いただきました。各協会からの活動実績報告及び活動予定の発表を行ない、また協会間での有意義な情報交換の場となりました。会議の後は懇親会を行ない、またNP0日本香港協会のご好意でAYOコンサートへご招待をいただき、各地事務局メンバー間の交流も深めることができました。

第7期チャイニーズ・マネージメント&マーケティング・スクール(CMMS)が開講しました



講義風景(大阪大学大学院 田中仁教授)

9月3日(木)、第7期チャイニーズ・マネージメント&マーケティング・スクール(CMMS)の開講式が行なわれました。当日は、全国連合会会長賤前宏氏からの挨拶、関西日本香港協会馬場正修氏および全国連合会名誉事務局次長古田茂美氏による基調講演をいただきました。9月10日(木)に北九州市立大学大学院王効平教授をお招きした第一回「華人系企業の経営様式」より講義を開始し、11月末時点で8回の授業が行なわれました。一部受講の方を含む25名の方が華人経営につき「目から鱗」を落とされ、毎回先生・モデレーターを含めて熱い議論が展開されております。

アジアユースオーケストラ日本公演を終えて

NPO法人日本香港協会 理事

アジアユースオーケストラ日本事務局代表 佐藤 劭

今年で19回目を迎えたアジアユースオーケストラのコンサートは、アジアの若者たちの熱い夏の祭典として最終日の公演がさる8月29日東京オペラシティコンサートホールで開催されました。



感動の渦に包まれた東京での最終公演

特に今年は、日本国土交通省観光庁の設立に伴い、日本・香港国際観光交流年の公式行事として位置づけられ、

香港特別行政区駐東京経済貿易代表部、香港政府観光局、日本香港協会等などの力強いご支援・ご協力の下、関係各位並びに沢山のお客様のご来場を賜り、大きな喝采とともにステージと聴衆が一体となって素晴らしい感動で包まれました。アジアユースオーケストラに携わる者として誠に感謝を禁じえません。

兪々、来年(2010年)は、コンサートツアーが始まって20回目の節目を迎える記念すべき年でもあります。運営上の課題は、難問山積ですが、OG・OBの先輩たちが世界各国、各地域で活躍している現状に接すると、本企画の一層の存在意義が確立されると共に、音楽を通して世界平和へのウエーブがますます広がって行くものと期待して止みません。感謝を込めて！

「中秋節パーティーを開催」

文化交流委員会

中秋の名月(満月)の日、10月3日土曜日のお昼、東京オペラシティ53階のCAFÉ53で中秋節パーティーを開催しました。中秋節は古代中国の帝王が秋の季節にお月様を祭る礼に由来します。香港では中秋節には家族が集って月餅を食べたり明月を楽しみ、周りの年配者や親戚、親友に月餅などをプレゼントして親睦を祈念する願いの日です。

日港文化交流の一環として、また、会員親睦を目的として開催した日本香港協会の中秋節パーティーでは、香港から直輸入の本場の月餅を賞味、キャセイ航空ビジネスクラスで行く香港往復航空券が当たる恒例のラッキードローもあり、香港経済貿易代表部のジュニー・チョック首席代表をはじめ60名を超える会員・会友が出席、盛会となりました。



見事トップ賞を獲得
キャセイのタイ営業本部長から
受け取られる六川順子さん

上級者向け日本語教室を開催中です

NPO法人 日本香港協会 理事 井上 一幸

日本香港協会(東京)では、10月より日本語教室を開催中です。ご好評いただいている広東語教室と対をなし、双方向での文化交流を目指しています。第一期の今回は、内外の日本語学校などで豊富な経験があり、現在は東京工芸大学にて日本語講師としてご活躍の長崎先生をお招きして、毎週水曜日に開催しています。

なぜ日本で日本語教室を、とお感じの方もいらっしゃるかもしれません。

この教室は、ひらがな、カタカナや初歩の文法を教えるのではなく、既に相当の日本語力がある方に、より上級の日本語力をつけていただくことを企図しています。

皆さまの周りでも珍しくないと思いますが、留学のため日本に来た、すでに日本企業に就職して働いている、日本で独立して仕事をしている、という方々が大勢いらっしゃいますよね。そういった方は、職場でも学校でも日本語を駆使して奮闘しています。しかしコミュニケーションに支障が全くないわけではありません。日本人が海外へ出て英語での会話に苦労するのと同じで、彼らも日本語でのコミュニケーションでは苦労の連続です。



今回の日本語教室はそのような方々のご要望、つまり、日本語は一応できるけれども「もっとうまく話せるようになりたい」「敬語を正しく使えるようになりたい」「お客様に失礼のない表現を身につけたい」… そんな要望にお応えするための講座です。したがって授業では、上級からさらに一歩上のビジネス日本語を主眼に置いています。

テーマは多彩で、名刺交換での話法、依頼やお断りの表現、メールの定型句、よく使われる慣用表現や決まり文句などがあります。和気あいあいとした雰囲気の中にも、気づきあり、議論ありの盛りだくさんの内容となっており、受講者一同、長崎先生には毎回「多謝」です。

なお受講者は香港人のみではなく、広く中華圏出身者を対象としています。第一期生の内訳は、香港の留学生2名、香港出身の会社経営者1名、本土出身の会社員3名の計6名です。

第2期は来年の旧正月明けにスタートします。周囲にご興味ありそうな方がいらっしゃいましたら、ぜひともお声かけください。

第7回経済セミナー開催「香港人と中国人そして日本人」

関西日本香港協会は今年に入り香港をテーマにした経済セミナーを開催しており、9月3日には三恵有限公司(香港)の顧問、西口元三氏を講師にお迎えし、「香港人と中国人そして日本人」と題した第7回経済セミナーを開催し92名が参加しました。講師の西口氏は住友電工の電線技術者として生産・開発業務を担当されインド、台湾、タイ、シンガポール等の海外で電線製造技術指導に活躍されました。1979年に帰任後、「これからはアジアの時代が来る」との強い思いで退社され、香港で香港人のパートナーと一緒に電機電子機器産業向け資材・部品販売会社を設立され、現在では深圳、上海、天津、タイ、アメリカ、台湾に支社を有する商社(社員105名、2008年年商160億円)を立派に経営しておられます。又、西口氏は中国内の貧しい地域(5ヶ所)に小学校の校舎を建設寄付されて教材や奨学金なども支援する社会貢献などもしておられ、1999年には『香港ビジネス20年』 2009年には『中国ビジネス30年』を出版しておられます。

西口氏は講演の中で当社の発展と電子電気部品から見た香港ビジネスの歴史、日本人と中国人の物の考え方や価値観の違いなどについて解説されました。よく失敗する日本人に関し、お客様は神様だとの考えで先方のペースに乗せられたり、儲け話に簡単にだまされたり、熱烈歓迎で舞い上がったり、会社が大きいとすぐ信用する傾向があるが、中国人はお客様は平等に扱い、だまされる方が恥ずかしいと思っており、熱烈歓迎は単なる儀式と冷静にみていること。又、日本人は会社対会社の付き合いで会社が大きいとすぐ信用するが、中国人は人と人との付き合いを重視し個人的に信用されることが大事であると指摘されました。

巨大なマーケットとして発展している中国とどう向き合うかは今後の重要な課題です。これからの日本、日系企業は中国製品と競争する必要は無く、中国では出来ない高品質の工業製品や農産物を自信をもって良い物を高く売る気概とお客様と共存共栄することが大切であると述べられました。

香港中秋節パーティー2009



中秋節パーティーで開会挨拶をする木全会長

関西日本香港協会では、日本・香港間の文化交流と会員同志の懇親行事として香港中秋節パーティーを毎年盛大に催しています。今年も恒例の香港

中秋節パーティーを10月6日にヒルトン大阪で開催し、世界同時不況が続く激しい経済情勢下にも拘らず昨年を上廻る89名が参加して中華料理のディナーパーティーを楽しみました。

パーティーは木全千裕会長の挨拶で始まり、東京から参加いただいた香港貿易発展局の日本首席代表古田茂美氏が歓迎挨拶をされ、昨年秋のリーマンショック後の激しい経済情勢下においても中国は内需中心に迅速な景気回復を実現しつつあり、香港が年間1兆円ベースで中国に投資している相変わらず元気いっぱいの香港を紹介され、法人会員の増強に注力している関西日本香港協会の今後の活動に対する期待を表明されました。又、来賓の中華人民共和国駐大阪総領事館の劉雲清領事が流暢な日本語で乾杯の音頭をとられ、お祝いの挨拶の中で中国では中秋節に月餅を食べて美しい中秋の名月を眺めながら一家団楽を行なう習慣が古くからあるが、日本で中秋節パーティーに沢山の人が集い中秋節を祝っていただけるのは大変嬉しく、又会員の皆様

が中秋節パーティーで会員同志が交流され懇親を深められるのは大変有意義なことだと話されました。

旧暦8月15日が中秋節で今年は10月3日が中秋節でした。中国や香港、海外の華人社会では旧正月と並び市民の生活にしっかりと根付いている伝統行事です。古代中国の農耕の神として月を拝む習慣や、秋の収穫を月に感謝する秋分の祭りから発展したもので、秋分の日から「月が一番丸く大きい」と讃えられる旧暦8月15日に移行したのは唐の時代と言われていています。日本でも田舎ではお酒とおもちを供えススキを飾って中秋の名月を拝む習慣がありましたが、日中共通の庶民文化の一つだと思います。

今年のパーティー・アトラクションはジャズボーカリストの中谷仁咲さんに歌ってもらい、パーティーを楽しい雰囲気盛り上げていただきました。今年新しく法人会員になっていただいた方達にも沢山参加していただき、参加者の皆さんの交流も活発で大変盛り上がった楽しいパーティーとなり、最後に田中義次副会長の閉会の挨拶で楽しかったパーティーを終了しました。



アトラクションで熱唱するジャズボーカリストの中谷仁咲氏

ワールド コラボ フェスタ出展について

中京日本香港協会 副会長・事務局長 佐藤 亮一



ワールドコラボフェスタ中京日本香港協会ブースの様子

10月24日(土)～25日(日)2日間に亘り、名古屋栄もちの木広場(テレビ塔前)において第5回世界各国56団体、飲食提供12団体によるイベントが開催された。

目的は、「国際交流、国際協力、多文化共生の分野で活動状況発表会」を掲げ、特に来年10月に開催されるCOP10、環境問題、人権問題など取り上げた活動が目立ち、一方当協会も2回目の参加であるが日本香港観光交流年としての日本・香港間のビジネス、観光面での経済・文化の幅広いPRを来場者にパンフレット、香港紹介の資料多彩に来場者に説明を行った。来場者は7万人(昨年6.4万人)と、かなりの関心度が年々増加している。当中京日本香港協会も国際交流面で日本・香港観光大使としてポスター(木村佳乃、成龍)が目を引き、香港政府観光局、香港貿易発展局等からの入会、配布資料送付戴きほ

とんど完配した。さて、環境問題として協会ブースでの来場者の声に香港の現状を説明すると観光に関し、香港イコールSARSのイメージあり過去忘れかけた問題が6年前とはいえ、未だ底辺の記憶としてあり、経済面においては、法人として企業の輸出入の玄関口年々増加しているとの声、前者に関しては、香港当局の観光地としての徹底した清掃、ウィルス根絶の努力といった、例えば朝の遅い香港としては4時頃から市衛生局が下水、マンホール消毒を繰り返した事実、現場にて私は何度も現場に直面したことを説明、後者に関しては個人での香港での生活(衣食住)、料理など共通の身近さPRしてゆく法人だけでなく個人に対応したテーマで輪を広げてゆく必要性が会員増強の中で手段として必要性を感じる。

上記のとおり、今回のテーマは「地域社会の実現めざし国際交流協力、多文化共生環境」について諸問題提起を考え行動する場を創り上げる構成団体をみても、NIC, AIA, NIA等々年々協力機関が増えてきており当協会も従来の観光ルートとひと味違う新しい方向性を模索している中、中国内地での「新生香港」をPRしてゆきたい。

今後とも、香港政府観光局、香港貿易発展局の援助、助言を受けながら推進してゆく所存である。

香港が今後、アジアの文化的なハブ(拠点)となりつつある現在(西九文化区)を始動させた場合、中京地区としては、芸術、工芸、産業観光を促進発表すべく国際交流のイベント地区になる為には巨大な展示場が必要となる。

以上は、参加団体企業、来場人員などから直に聞こえてきた声として記憶したい。

新しいスタイルの香港紹介 『香港路線バスの旅』が出版されました



香港はバスや電車の公共交通機関がとて発達している都市です。普通の路線バスが香港各地を縦横に結び、香港の狭さとあいまって香港での移動を便利なものになっています。でも、バス利用をちょっと躊躇している人もいるのも事実です。

本書は香港路線バスの特徴や利用方法を説明し、難しそうでいて実は手軽に乗れる香港バスの旅を勧めています。30の路線を取り上げて、具体的に香港の旅を提案するスタイルです。香港島や九龍市街地の路線に加えて、葵涌コンテナターミナル、石澳や清水湾ビーチ、ランタオ島大澳や馬湾などの離島、そして中国への往来路線も老舗の落馬洲ルートに皇崗バスだけでなく、新しい港深西部公路も取り上げています。レジャーには海洋公園、湿地公園、ディズニーランドなど、香港の旅や暮らしに必要なルートにも目配りを欠いていません。

実利的な記述ばかりではなく、バス車内に掲示されている利用規則や車体広告、そしてミニバスにも言及があって、読んでいただけで、香港にいるような気分になれます。

出版/TOKIMEKIパブリッシング 著者/小柳淳(日本香港協会広報広報副委員長) 定価/1,680円

九州日本香港協会 事務局

九州日本香港協会発足

1991年4月の設立より福岡日本香港協会として活動してまいりましたが、2009年7月15日よりその活動範囲を広げるべく、九州日本香港協会として新しくスタートいたしました。

これまで同様、会員の皆様により有益かつタイムリーな情報提供を行うことにより、九州と香港の交流に力を尽くしてまいりますので、ご支援ご協力の程宜しくお願い致します。

臨時総会時の石原会長（右）



孫文ゆかりの地をたずねて（熊本県荒尾市 宮崎兄弟資料館）

9月5日より公開され、九州でも福岡、長崎、熊本で公開された映画「孫文-100年先を見た男」、ご覧になった方も多いかと思います。さて、今回は、その孫文とゆかりの深かった宮崎兄弟の資料館、生家をご紹介します！



孫文が民蔵にあてた書「博愛行仁」

孫文(1866～1925)は、清末民初の政治家、革命家であり、初代中華民国臨時大総統。1911年に辛亥革命を起こし、中華民国を誕生させ「中国革命の父」(国父)と呼ばれています。孫文は、広東省の農家に生まれ、ハワイ移民として成功していた兄を頼ってホノルルの学校に入り、キリスト教と民主主義の精神に触れ、16歳で帰国。その後、革命団体興中会を結成、1895年に広東で蜂起するも失敗して亡命、2年後、横浜で宮崎滔天と出会います。日本の志士との交流を深め、1905年東京で滔天と共に中国同盟会を結成、指導理念として三民主義を唱えました。1911年に辛亥革命を起こし、清朝は倒れアジアで最初の共和国である中華民国が誕生しました。なお残る封建的軍閥勢力と戦いながら、彼の三民主義は国共合作と共に反帝国主義の旗印を明らかにし、1925年以後の国民革命運動に思想的な基礎を与えました。



1897年訪問時の筆談風景

今回ご紹介する宮崎兄弟の生家・資料館は、平成4年に市制50周年を迎えた熊本県荒尾市が生家の復元整備と資料館の建設を行い、中国との友好・交流のシンボル施設として平成5年6月に開館しました。資料館には、孫文と辛亥革命に大きな影響を与えた宮崎兄弟にまつわる様々な資料が展示されており、孫文が「革命におこたらざる者は宮崎兄弟なり」の語を残しているように、宮崎兄弟の助力なくしては辛亥革命は成し遂げられなかったのだということを汲み取ることができます。また、熊本県の史跡に指定されている築200年以上の生家では、亡命中の1897年に孫文が宮崎家を訪問した時の様子が再現されています。(孫文と滔天は、言葉が通じなかった為、おもに筆談で会話をしていたそうです。)

辛亥革命成功のお礼として1913年に訪れた際には、孫文と宮崎一家で集合写真を撮影しています。その背景に写っている梅の木は、樹齢250～300年経った現在でも健全で、毎年春先には見事な白い花を咲かせています。

皆様もぜひ国境を超え、真の友情で結ばれた孫文と宮崎滔天の思いに触れてみてはいかがでしょうか。



宮崎兄弟資料館・生家



1913年訪問時の
集合写真に写っている梅の木

みなさんも九州へお越しの際は、ぜひお立ち寄りください！

荒尾市宮崎兄弟資料館

〒864-0041 荒尾市荒尾949番地1 電話 0968-63-2595

開館時間：09:30～17:00(ただし、資料室への入館は16:30まで)

資料館観覧料：小・中学生 100円(団体割引20名以上80円)
一般(高校生以上) 210円(団体割引20名以上160円)

休館日：月曜日(その日が祝日にあたるときはその翌日)
祝日の翌日(ただしその日が日曜日にあたることを除く)
年末年始(12月28日から1月4日まで)

アカデミー賞受賞作品「おくりびと」のロケ地、山形

山形日本香港協会 会員 小泉 俊哉



庄内映画村オープンセット

皆様もご存知だと思いますが、山形県は映画のロケ地として今、とても注目されている所なのです。

鶴岡市出身の小説家 藤沢周平原作の「蝉しぐれ」をはじめ昨年大ヒットし、モンリオール世界映画祭グランプリ、米アカデミー賞「外国語作品賞」、日本アカデミー賞など輝かしい賞を殆んど総なめにした「おくりびと」や「花のお江戸の釣りバカ日誌」「隠し剣鬼の爪」「たそがれ清兵衛」「山形スクリーム」「ICHI」「山桜」「スイングガールズ」「スキヤキウエスタンジャンゴ」など本当にあれもこれもかと驚くほどの時代劇、現代劇が撮影されていて、これからも1年先まで撮影スケジュールが組まれているそうです

また今年の9月には、ぐるっと360° 大自然の中に日本の原風景を体感させてくれる庄内映画村(鶴岡市羽黒町川代)もオープンし新たな観光スポットとして話題になっております。私も先日見学に行ったのですが、本当にその時代にタイムスリップしたようで、この山形・庄内が「日本のハリウッド」と言われる日が来るかもしれないとひそかに思いながら、心とむ一日を過ごしてきました。

最近では中国からの山形ツアーも多くなっているとの事。まだ来られていない方には是非こちらも体感して頂きたいものです。

正直ここまで山形を、映画のロケ地としてメジャーにするのは並大抵の努力ではなかったらうと思います。山形の良さを失うことなく新しい山形を全国、そして海外へとアピールしていく事は山形の発展に重要なことだと思います。



庄内映画村オープンセット

中国ではNHKの連続テレビ小説「おしん」を知らない人がいないと聞いております。

「おくりびと」もまた山形の庄内平野を舞台に美しい自然と四季の移ろいとともに叙情的に描き夫婦の愛、我が子への無償の愛、父や母、両親への思いが美しい別れの儀式の中で表現されています。

笑い・涙・普遍的でシンプルな感情はきっとまた海を越えて受け入れられていくと思います。

日本の原風景を残す山形と、東方の真珠とも呼ばれ旅行買い物の天国と称される香港を比較してみますと、共通するところはあまりないような思われますが、香港の魅力は多くの他民族や文化を受け入れながらも決して香港人の感性が失われない芯の強さ、生命力を持っているところだと思っております。



庄内映画村オープンセット

受け入れる度量の懐が大きいからこそその個性も消えることがないでしょう。そしてその強さを山形人も持っていると思うのです。

これからもあるがままの山形を大切にしながら自由で新しい感性、垣根を払った感覚を受け入れて変化と成長を遂げる山形でありたいものです。

編集部所感

人の遺体を奇麗にして、あの世へ送り出す風俗・習慣について、初めて見聞きしたのはアメリカ映画「God Father」で、マフィアの親分がライバルに惨殺された息子の遺体を見て、母親が悲しまないようにと配下の男に修復を命ずる場面であった。一方、本土の華南地方では、死後遺体に直接手を施すことはないが、土葬後2~3年たって完全白骨化した後、掘り出して清めた上で壺に納める風習があり、香港でも郊外の山を歩いているとその形跡を目にすることがある。措置の時間差はあるが、その根底には相通じるところがあるのかも知れない。

「2009香港 札幌の物産と観光フェア」 「香港・中国 食品販路拡大セミナー」開催について

北海道日本香港協会 事務局

今回は9月に香港で開催されました「2009香港 札幌の物産と観光フェア」と札幌で開催されました「香港・中国食品販路拡大セミナー」についてお知らせ致します。

「2009香港 札幌の物産と観光フェア」

日 時：2009年8月31日(月)～9月17日(木)
会 場：香港 シティ・スーパー 4店舗
主 催：札幌市、(社)札幌物産協会、札幌商工会議所、
(財)さっぽろ産業振興財団、アジアにおける札幌の
物産と観光フェア実行委員会
協力：北海道日本香港協会、(株)北洋銀行 ほか



コロケの実演販売の様子

本フェアは、日本食品の輸出先No.1の香港において、札幌の物産を広く紹介し、販路の開拓・拡大を目的に、昨年に引き続き開催されたものです。

期間中、香港シティ・スーパー各店で、札幌市内を中心に道内企業35社、167種類の食品の催事販売が行なわれ、リピーターの方から「開催を心待ちにしていた」との声も聞かれるなど大変盛況でした。

また、実演販売を行ったラーメンやコロケなども人気を呼んでいました。



ラーメンの実演販売の様子

「香港・中国 食品販路拡大セミナー」

日時：2009年9月4日(金)
会場：小樽商科大学 札幌サテライト
主催：香港貿易發展局
日本貿易振興機構北海道貿易情報センター
アジアにおける札幌の物産と観光フェア実行委員会
後援：北海道日本香港協会、(株)北洋銀行 ほか
講演Ⅰ：「日本食品輸出先としての香港」
講師：香港貿易發展局 マーケティング・マネージャー
伊東 正裕 氏
講演Ⅱ：「香港向け日本農産物等輸出戦略」
講師：(株)大昌貿易行 業務部課長 雷 彩霞 氏

本セミナーは、11月に香港で行なわれた「北海道商談会 in 香港2009」に向けた事前セミナーとして開催されたものです。

講演Ⅰでは伊東氏より食品販売市場としての香港の優位性や最新の市場動向、中国大陸やアジアへのゲートウェーとしての機能、取引に際しての留意点などを、詳細にご説明頂きました。

また、講演Ⅱでは、雷氏より日本からの香港への食料品輸出に関する貿易実務や、販売方法などを、具体的事例を交えながらご説明頂きました。



講演を行なう香港貿易發展局 伊東マーケティング・マネージャー

講演終了後の質疑応答では、講師と参加者との間で活発な意見交換が行なわれ、大変有意義なセミナーとなりました。

また、当初の定員を大幅に超える約70名の方がセミナーに参加されたことに加えて、セミナーの様子が当日夕方に道内のテレビニュースで紹介されるなど、日本国内の景気低迷が長引く中、多くの企業が食品の販売先として、香港市場に期待していることを改めて感じました。

宮城日本香港協会 事務局 武田 功

マイケル・シー香港貿易發展局元総裁が来仙されました

本年7月10日(金)～11日(土)、香港貿易發展局のマイケル・シー元総裁ご一行が仙台を訪問されました。アルバート・ラム元政府民間航空局長も同行され、魯迅の学んだ東北大学の階段教室や本多記念館、仙台市博物館を見学されました。

11日夜には、ホテル仙台プラザにて当協会の顧問である村井知事ご出席の下、副会長であるJTB東北の小林社長や代表理事の小野寺県議会議員が出席して、歓迎の懇談会を開催しました。

席上、香港との貿易振興や航空便の復活、魯迅関連施設による観光振興など、今後の宮城発展のための様々な話し合いが行われ、和やかな中にも有意義な懇談会となりました。



マイケル・シー氏来仙を記念して

広東語教室で暑気払いを開催しました

21年度の広東語教室を始めて3ヶ月が過ぎようとしています。1年目、2年目と一緒にの教室、初心者用とちょっと難しい中級者用とを織り交ぜながらの勉強で、先生も大変じゃないかと思いますが、参加者の皆さん元気に勉強に励んでいます。8月18日は、ちょっと息抜きという意味も含めて、暑気払い懇談会を開催しました。広東料理を食べることはもちろん、料理長の衛漢全さんの生の広東語が聞けるという特典付きということもあって、香港幸福楼(国分町店)を会場に選びました。料理長の解説付きの広東料理が次から次と、最後は丸ごとスイカのデザートまでサービス、参加者は「わー」という歓声をあげては、料理を堪能していました。



難しい広東語勉強の合間のひとときです

女性部会主催による七夕ライブコンサート及び料理教室を開催しました

去る7月10日(金)、千明せらさんによるライブコンサートを開催しました。地元のバンドグループ、エル・アルマ(ケーナ等の南米の楽器を演奏)が友情出演、30名を越える会員、友人の方々が、2時間という短い時間でしたが、音楽を堪能することができました。



千明せらさんの熱い歌声が・・・

また、9月11日(金)開催の料理教室では、「鯖の利休焼き」「豆乳茶碗蒸し」「養老春巻き(チーズ入り)」「抹茶ゼリー」の四品を勉強しました。和食ですが、香港では和食もなかなかの人気です。できあがった後の試食では、自分の腕を確認しながら、また互いに褒め合いながら、そして、家庭での料理光景を思い浮かべながら、うれしそうに食べていました。とても和やかな料理教室でした。

食ぶるときが一番幸せ
(池田女性部会長)**YOUYOUクラブ主催の芋煮会を開催しました**

去る10月17日(土)名取川湖畔の茂庭荘の前庭で開催された今年の芋煮会、秋晴れの晴天の中、小野寺代表理事、油川理事出席のもと、41名の参加者を得て、成功裏に終えることができました。



子どもさんも元気に参加しました

沖縄日本香港協会 通常総会・懇親会 開催

沖縄日本香港協会 事務局

沖縄日本香港協会(会長:國場幸一)平成二十一年度通常総会が、平成二十一年九月二十九日(火)午後四時より、那覇商工会議所 二階ホールで開催された。



平成21年度 沖縄日本香港協会総会

沖縄日本香港協会は、昨年、沖縄と香港の直行定期便が五年ぶりに就航したことを期に、香港貿易発展局の協力の下、沖縄と香港の文化・経済交流を目的に平成二〇年五月に設立された。通常総会では、平成二〇年度事業報告・収支決算及び平成二一年度事業計画・収支予算が、承認された。

昨年度は、知事のトップセールス及び香港経済ミッションや香港貿易発展局との共催による「沖縄日本香港協会新春講演会～食品からみた香港～」の開催、沖縄和僑会との情報交換会開催など、活動が活発に行われた。

本年度は、香港フォーラムへの参加、春節香港ビジネスセミナーの開催、香港ビジネス協会・全世界ネットワークへの会員登録の促進などが計画され、了承された。

その後、那覇商工会議所が本年度より実施する農産物等輸出促進対策事業について担当職員より事業説明及び報告がおこなわれた。

本年、農林水産省が掲げる「農林水産物の輸出額を平成25年までに1兆円規模とする」政策の一環として、那覇商工会議所が農産物等輸出促進対策事業を実施するにあたり、沖縄日本香港協会も協力・支援している農産物等輸出促進対策事業では、沖縄県物産公社と連携した香港・マカオの高級百貨店・スーパーマーケットにおける販売促進活動、ANAの国際物流拠点の運用実施にあわせたコンテナ輸送技術やコスト管理、温度・湿度等を記録した品質管理の実証実験を行う予定である。

沖縄における航空物流の利便性は高まりつつあるが、航空輸送費は、依然高く、より多くの航空貨物の確保が、コスト削減には必要である。

香港において、日本の食材は比較的高価であるが、食の安心・安全を求める富裕層は確実にあり、沖縄の農産物も香港に受け入れられる可能性が十分に



沖縄野菜の販売コーナー

あることが報告された。

香港での事業展開するにあたり、香港貿易発展局を訪問し、情報交換・アドバイス等をうけることができたことが有意義であったと報告がなされた。

総会終了後は、懇親会が開催され、会員相互の親睦を深めた。

本年度は全日空の那覇空港の物流拠点の運用開始や香港エクスプレス社の香港直行便の増便など、沖縄と香港のビジネス交流の可能性が高まってきており、沖縄日本香港協会の活動も益々期待される。



懇親会で挨拶をする國場幸一会長

飛龍 No.63 2009年12月 発行

(禁断転載)

日本香港協会 全国連合会

〒102-0083 東京都千代田区麹町3-4 トラスティ麹町ビル6階
香港貿易発展局 東京事務所内
電話(03)5210-5901 FAX(03)5210-5860

NPO法人日本香港協会(東京)

〒102-0083 千代田区麹町3-4 トラスティ麹町ビル6階
香港貿易発展局内 電話(03)5210-5870

関西日本香港協会

〒541-0052 大阪市中央区安土町2-3-13 大阪国際ビルディング10階
香港貿易発展局内 電話(06)4705-7030

中京日本香港協会

〒541-0052 大阪市中央区安土町2-3-13 大阪国際ビルディング10階
香港貿易発展局内 電話(06)4705-7030

九州日本香港協会

〒812-8566 福岡市博多区博多駅前3-25-21
九州旅客鉄道(株)経営企画部内 電話(092)474-0747

山形日本香港協会

〒990-2432 山形市荒橋町1-14-21
(株)日本不動産コンサルティング内 電話(023)633-2110

北海道日本香港協会

〒060-8661 札幌市中央区大通西3-11
北洋銀行国際部内 電話(011)261-4288

宮城日本香港協会

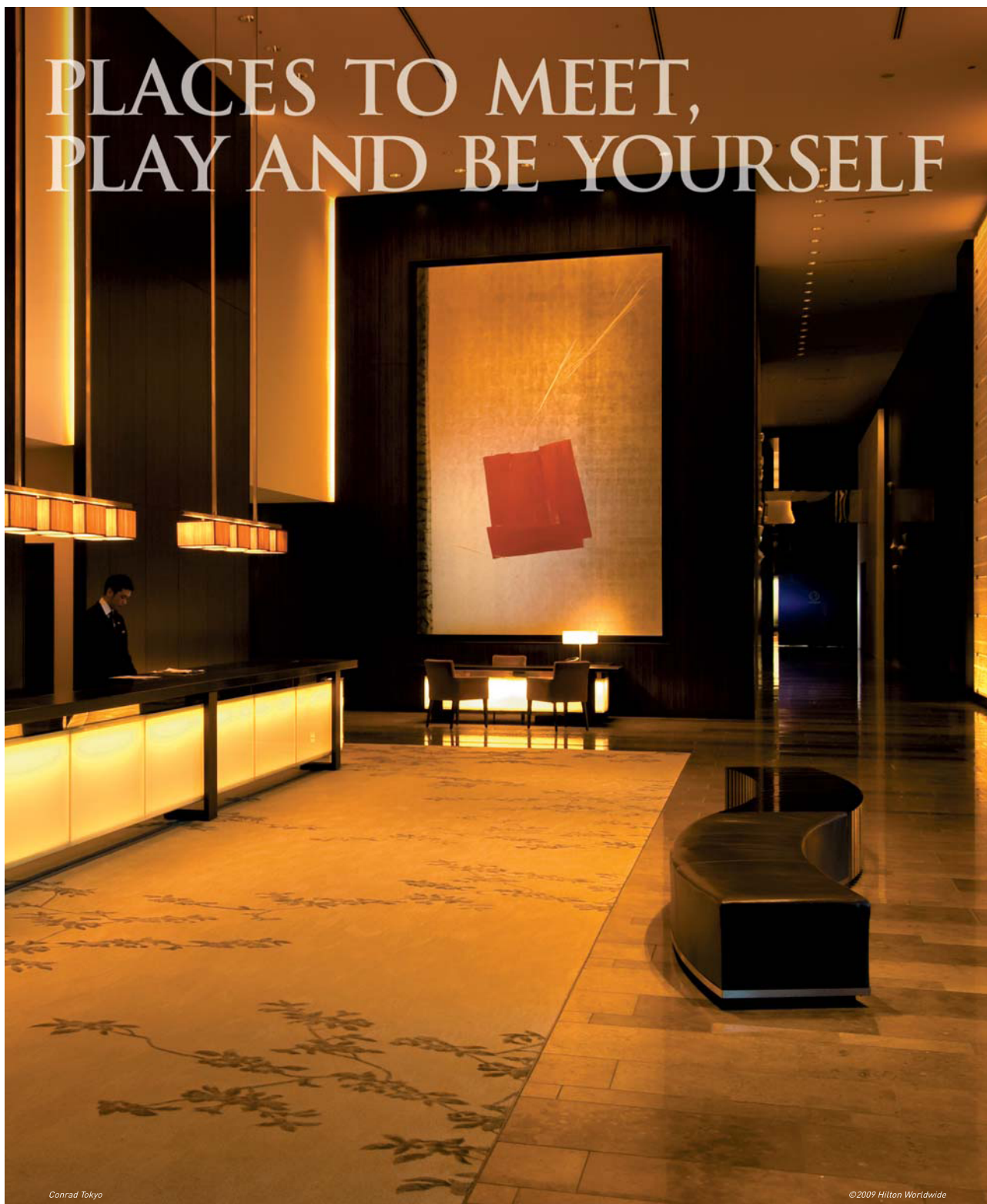
〒980-0811 仙台市青葉区一番町3-7-23 明治安田生命仙台一番町ビル3階
(株)JTB東北 交流文化事業部内 電話(022)212-5552

沖縄日本香港協会

〒900-0033 那覇市久米2-2-10
那覇商工会議所内 電話(098)868-3758

URL <http://www.jhks.gr.jp>

PLACES TO MEET, PLAY AND BE YOURSELF



Conrad Tokyo

©2009 Hilton Worldwide

銀座から徒歩圏内に位置し、浜離宮恩賜庭園や東京湾の絶景を一望する「コンラッド東京」。
和のモダンデザインを基調にした館内には、290の客室と最新機器を備えた宴会施設、「水月スパ&フィットネス」、
「ゴードン・ラムゼイ at コンラッド東京」「チャイナブルー」など4つのレストランとバー&ラウンジが揃い
ワールドクラスのおもてなしで皆様をお迎えいたします。

THE LUXURY OF BEING YOURSELF

ご予約・お問い合わせ 03 6388 8000 または ConradTokyo.co.jp

〒105-7337 東京都港区東新橋1-9-1 電話:03 6388 8000 ファックス:03 6388 8001 Eメール:TokyoInfo@ConradHotels.com

CONRAD®
TOKYO